
ましら

楓岱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まじり

【著者名】

N4018F

【作者名】

楓岱

【あらすじ】

小春日和の散歩道に口を開けた大穴。私はそれに飲み込まれてしまつた。

(編集者)

たまにセシュールな短編もいんだじやなにかど。 タイプと読んで、
なんじや いつや と思つてからればいいのです。

川沿いの遊歩道を、私は歩いていた。右手には野草の生い茂る野原が広がり、遊歩道との間はフェンスが一重に設けてある。遊歩道側のフェンスは腰ぐらいの高さで、そこから1mほど離れて高さ3mほどのフェンスが平行に並んでいる。

左手は堀が延びていて、少し先で途切れているのが見える。田差しは強いが、吹き抜けていく秋風が心地よい。そんなのどかな昼下がりである。私の脇を下校途中の小学生が駆け抜けていった。

堀の途切れた先には2mほどの古いフェンスがあった。小学生達がフェンス越しに何かを眺めている。私は横目でそれを追った。フェンスの先は馬場の様になつていて、障害物や砂場やらが設けられていた。しかし、正確に言えば「馬場」ではない。

そこに放たれていたのは猿である。が、猿というような可愛らしいものではない。「リラとオラウータンを足して2で割つて、さらによく計算しておこう」と教わった。それが数頭いる。猿を放しておくには困いが貧弱すぎると思ったが、どうやらそれは「登る」ことが出来ないらしい。なので、この程度のフェンスで十分だと飼い主は判断したのだろう。私はしばし観察して、そのようないくつかの結論に達していた。

しかし、見れば見るほど珍妙である。私は「キモツ」と口走つていた。おそらく子供達も同じだったに違いないが、不覚にも大人である私が口に出してしまっていた。

それを聞きとがめたのかはわからないが、群の中の一頭が鷄冠を振り乱して、こちらに突進してきた。大猿は糞を投げてきた。辛うじて避けたつもりが、小さな固まりが太股に当たった。あまりの憤慨に猿を睨みつけてしまった。次の瞬間、重大な過ちを犯したこと

に気付いたがもう遅い。私はそれと目が合ってしまった。

激高した大猿は背の高さほどのフェンスに掴みかかり、奇声を発しながらそれを揺さぶりだした。いや、揺さぶるなどという生やさしいものではない。フェンスは足場が浮き上がり、今にも外れそうである。というより、あっさり倒れた。拍子抜けする程に。そしてそこから大猿が躍り出でてくる。

逃げなければ殺される！

胃が収縮して、全身の毛穴が逆立つのがわかる。本能が瞬時に赤ランプを灯す。その場に居たなら誰でもそうなるだろう。それは間違いない。何故なら、程度の差こそあれ、全員が行動に移っていたのだから。

私のすぐ隣にいた子は右手の低いフェンスによじ登り、背の高い方へ飛び移ろうとしていた。その選択はすこぶる正しいように思え、私もためらわずにフェンスを飛び越えた。そして、向こう側に飛び降りると、草原を転ぶように駆けた。

振り返ると、遊歩道を全速力で逃げていく子供達を大猿は追いかけていた。阿鼻叫喚とはこのような光景を言つのだろうか。

その瞬間まで、子供を助けなくてはという考えは、一切浮かばなかつた。恥ずかしながら、あの大猿に気圧されて、完全なパニックに陥っていたのだ。私と一緒に逃げていた子供はどこかに行つてしまつたようだが、今は追われている子供達を助けねばならないと思つた。私は引き返した。

子供達の悲鳴が住宅街の方から響いてくる。それを聞きながら、私は警察に電話で状況を説明していた。既に何件かの通報が入つてゐるらしく、落ち着いてくれだの、現場にはもう警官が向かつてゐるから、安全な場所に避難してくれだの言つてゐる。

生返事をしながら、何とか子供達を助ける術は無いものかと頭をひねっている内に、パトカーが路地を封鎖した。なるほど、大した機動力である。税金を払っているだけのことはある。

閑静な住宅街は一時物々しい雰囲気に包まれたという奴だ。そして小一時間ほどの大捕物の末、大猿は捕獲されました、といった筋書きならば、ワイドショーに珍騒動ネタを提供して一件落着となるところだが、現実はそれどころでない。

路地から、真顔の警官が猛ダッシュでこちらに向かってくる。いや、全精力をつぎ込んで逃げてくる。その後ろには涎まみれの大猿が迫っている。

ああ、だめなんだ。私はそう思っていた。

(後書き)

とまあ、いろんな夢を見たところお詫び（寒詫）あまつてリアルだったのでもとめられました。……病気じやないですよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4018f/>

ましら

2011年1月12日21時21分発行